

「サードマン」

多谷 昇太

霧まごう 小雨のけざる
ある夜のこと

おぼろにかすむ街灯の下
男がひとり立っている

隠し続けていたその存在を

ついに示すかのように

無言で雨にぬれながら たたずんでいる

その姿もて何かを云いたげだ

何を…？

おまえがして来たこと 思っただけ

夢 希望 行動 挫折 そして後悔

I KNOW MORE THAN YOU

みんな知っているぞ と

このままでは遠からぬ

おまえの破局を告げに来た と
そう 全身で語っているようだ

団地の四階の窓辺から 見おろすこの俺に
見せてはならないその姿を
ついに見せてくれている

我人生の 第三の男…

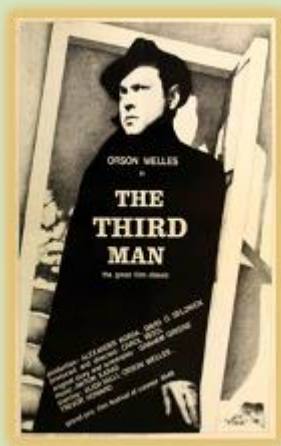
サードマンは

ソフト帽のつばを手で上げて

きつとばかり俺を睨みつけると

やがてトレンチコートの襟を立てて

雨の歩道を歩み去って行った…



「いのち 生命の問答」

多谷 昇太

雨粒に打たれて笹の葉が

うなづくように一つ上下にゆれた。

「おい、生きているかい？」と雨粒。

「ああ、頑張ってるさ」と笹の葉。

公園の片隅に生えた、誰もかえりみない

小さな笹の木と、ふり始めた雨粒との

取るにたらぬ動き、その邂逅…

しかし詩人の目にはそれが問答と写る。

最大の生命ガイアと、彼女の無数の子のひとつ、

小さな笹の木との、

心空しくすれば聞こえてくる、生命の問答…

やがて従容とふりだした雨の中、

小さな笹の木は、無限の帳に包まれて、

ガイアのふところ深く抱かれて、

共生と調和の波動を、
静かに静かに詩人へと送りはじめた…

